

1. 方法論番号

010

2. 方法論名称

変圧器の更新

3. 適用条件

本方法論は、次の条件の全てを満たす場合に適用することができる。

- 条件 1：事業実施前の変圧器よりも高効率の変圧器に更新すること。
- 条件 2：変圧器の更新を行わなかった場合、事業実施前の変圧器を継続して利用できること。¹
- 条件 3：事業実施前及び実施後のエネルギー使用量に最も影響を与える活動量（稼働時間）を把握できること。
- 条件 4：変圧器を導入した事業者が、事業実施後の変圧器で供給される電力を自家消費すること。

4. バウンダリー

更新される変圧器及び当該変圧器により電力供給が行われる範囲。² 自家用発電機を使用する場合はこれを含む。

5. ベースライン排出量

(1) ベースライン排出量の考え方

ベースライン排出量は、変圧器の更新を行わずに、事業実施前の変圧器を使用し続けた場合に想定される二酸化炭素排出量である。

(2) ベースラインエネルギー使用量

1) 系統電力を使用する場合

$$EL_{BL} = [P_{i,BL} + (\alpha_{PJ} \div 100)^2 \times P_{c,BL}] \times T_{PJ} \quad (\text{式 1})$$

記号	定義	単位
EL_{BL}	ベースライン電力使用量	kWh/年
$P_{i,BL}$	事業実施前変圧器の無負荷損	kW
$P_{c,BL}$	事業実施前変圧器の 100% 負荷時の負荷損	kW
α_{PJ}	事業実施後の年平均負荷率	%
T_{PJ}	事業実施後の活動量	h/年

¹ 故障又は設備の老朽化等により事業実施前の変圧器を継続して利用できない場合には、条件 2 を満たさない。

² 附帯の補機類については、本方法論のバウンダリー外とする。

- ベースライン電力使用量は、事業実施前の変圧器における電力損失のことである。
- $P_{i,BL}$ （無負荷損）・ $P_{c,BL}$ （100%負荷時の負荷損）は、計測試験によって把握するものとするが、計測が困難な場合にはメーカーのカタログ・仕様書の値など把握可能なデータを使用することができる。

2) 自家用発電機による発電電力を使用する場合

$$Q_{fuel,BL} = \left[P_{i,BL} + (\alpha_{PJ} \div 100)^2 \times P_{c,BL} \right] \times T_{PJ} \times 3.6 \times 10^{-3} \times \frac{100}{\varepsilon_S} \quad (\text{式 2})$$

記号	定義	単位
$Q_{fuel,BL}$	ベースラインエネルギー使用量	GJ/年
$P_{i,BL}$	事業実施前変圧器の無負荷損	kW
$P_{c,BL}$	事業実施前変圧器の 100%負荷時の負荷損	kW
α_{PJ}	事業実施後の年平均負荷率	%
T_{PJ}	事業実施後の活動量	h/年
ε_S	自家用発電機の発電効率	%

(3) ベースライン排出量

1) 系統電力を使用する場合

$$EM_{BL} = EL_{BL} \times CF_{electricity,t} \times \frac{44}{12} \quad (\text{式 3})$$

記号	定義	単位
EM_{BL}	ベースライン排出量	tCO2/年
EL_{BL}	ベースライン電力使用量	kWh/年
$CF_{electricity,t}$	電力の炭素排出係数	tC/kWh

2) 自家用発電機による発電電力を使用する場合

$$EM_{BL} = Q_{fuel,BL} \times CF_{fuel,S} \times \frac{44}{12} \quad (\text{式 4})$$

記号	定義	単位
EM_{BL}	ベースライン排出量	tCO2/年
$Q_{fuel,BL}$	ベースラインエネルギー使用量	GJ/年
$CF_{fuel,S}$	自家用発電機燃料の単位発熱量当たりの炭素排出係数	tC/GJ

6. 事業実施後排出量

1) 系統電力を使用する場合

$$EM_{PJ} = EL_{PJ} \times CF_{electricity,t} \times \frac{44}{12} \quad (\text{式 5})$$

$$EL_{PJ} = [P_{i,PJ} + (\alpha_{PJ} \div 100)^2 \times P_{c,PJ}] \times T_{PJ} \quad (\text{式 6})$$

記号	定義	単位
EM_{PJ}	事業実施後排出量	tCO2/年
EL_{PJ}	事業実施後電力使用量	kWh/年
$CF_{electricity,t}$	電力の炭素排出係数	tC/kWh
$P_{i,PJ}$	事業実施後変圧器の無負荷損	kW
$P_{c,PJ}$	事業実施後変圧器の 100%負荷時の負荷損	kW
α_{PJ}	事業実施後の年平均負荷率	%
T_{PJ}	事業実施後の活動量	h/年

- 事業実施後変圧器の $P_{i,PJ}$ (無負荷損)、 $P_{c,PJ}$ (100%負荷時の負荷損) は、計測試験によって把握するものとするが、計測が困難な場合にはメーカーのカタログ・仕様書の値など把握可能なデータを使用することができる。

2) 自家用発電機による発電電力を使用する場合

$$EM_{PJ} = EL_{PJ} \times 3.6 \times 10^{-3} \times \frac{100}{\varepsilon_S} \times CF_{fuel,S} \times \frac{44}{12} \quad (\text{式 7})$$

$$EL_{PJ} = [P_{i,PJ} + (\alpha_{PJ} \div 100)^2 \times P_{c,PJ}] \times T_{PJ} \quad (\text{式 8})$$

記号	定義	単位
EM_{PJ}	事業実施後排出量	tCO2/年
EL_{PJ}	事業実施後電力使用量	kWh/年
$CF_{fuel,S}$	自家用発電機燃料の単位発熱量当たりの炭素排出係数	tC/GJ
$P_{i,PJ}$	事業実施後変圧器の無負荷損	kW
$P_{c,PJ}$	事業実施後変圧器の 100%負荷時の負荷損	kW
α_{PJ}	事業実施後の年平均負荷率	%
T_{PJ}	事業実施後の活動量	h/年
ε_S	自家用発電機の発電効率	%

7. リークージ排出量

 LE

(式 9)

記号	定義	単位
LE	リークージ排出量	tCO ₂ /年

- 排出削減事業の実施により生じるバウンダリー外での温室効果ガス排出量の変化であって、技術的に計測可能かつ当該事業に起因するものを、リークージ排出量として考慮する。
- 設備の生産、運搬、設置、廃棄に伴う温室効果ガス排出量は、リークージとしてカウントしない。

8. 排出削減量

 $ER = EM_{BL} - (EM_{PJ} + LE)$

(式 10)

記号	定義	単位
ER	排出削減量	tCO ₂ /年
EM_{BL}	ベースライン排出量	tCO ₂ /年
EM_{PJ}	事業実施後排出量	tCO ₂ /年
LE	リークージ排出量	tCO ₂ /年

9. モニタリング方法

ベースライン排出量と事業実施後排出量を算定するために必要となる、モニタリング項目及びモニタリング方法例を下表に示す。

モニタリング項目		モニタリング方法例
$P_{i,BL}$	事業実施前変圧器の無負荷損 ³	<ul style="list-style-type: none"> 試験結果報告書の値をもとに算定 カタログ値、仕様書の値をもとに算定
$P_{c,BL}$	事業実施前変圧器の 100% 負荷時の負荷損	<ul style="list-style-type: none"> 試験結果報告書の値をもとに算定 カタログ値、仕様書の値をもとに算定
$P_{i,PJ}$	事業実施後変圧器の無負荷損	<ul style="list-style-type: none"> 試験結果報告書の値をもとに算定 カタログ値、仕様書の値をもとに算定
$P_{c,PJ}$	事業実施後変圧器の 100% 負荷時の負荷損	<ul style="list-style-type: none"> 試験結果報告書の値をもとに算定 カタログ値、仕様書の値をもとに算定
α_{PJ}	事業実施後の年平均負荷率	<ul style="list-style-type: none"> 計測⁴
ε_S	自家用発電機の発電効率	<ul style="list-style-type: none"> 計測 カタログ値をもとに算定

³ 変圧器の無負荷損及び 100% 負荷時の負荷損を実測する場合、原則、事業実施前後で統一された測定条件で実測することが必要である。

⁴ 例えば、BEMS 電力日報から算出した月平均負荷率をもとに、年平均負荷率を算出することが出来る。

T_{PJ}	事業実施後の活動量	<ul style="list-style-type: none"> 計測 稼働日数をもとに算定
$CF_{fuel,S}$	自家用発電機燃料の単位発熱量当たりの炭素排出係数	<ul style="list-style-type: none"> 燃料供給会社のスペックシートをもとに算定 デフォルト値を利用
$CF_{electricity,t}$	電力の炭素排出係数	<ul style="list-style-type: none"> デフォルト値を利用 $CF_{Electricity,t} = C_{mo} \cdot (1 - f(d)) + C_a(d) \cdot f(d)$ <p>ここで、</p> <p>t: 電力需要変化以降の時間（事業開始日以降の経過年）</p> <p>C_{mo}: 限界電源炭素排出係数</p> <p>$C_a(d)$: t年に対応する全電源炭素排出係数</p> <p>$f(d)$: 移行関数</p> $f(d) = \begin{cases} 0 & [0 \leq t < 1 \text{ 年}] \\ 0.5 & [1 \text{ 年} \leq t < 2.5 \text{ 年}] \\ 1 & [2.5 \text{ 年} \leq t] \end{cases}$ <ul style="list-style-type: none"> 排出削減事業者等からの申請に基づき、$CF_{Electricity,t}$として全電源炭素排出係数を利用することができる

10. 付記

- 限界電源炭素排出係数を適用する排出削減事業については、当該事業の承認申請に当たって、全電源炭素排出係数を適用した場合の排出削減量の試算を付すこととする。
- 施設として複数の電力源を常時併用する場合、事業実施後の当該施設における系統電力使用量と自家発電電力量を測定し、その割合によって、当該設備の電力使用量がいずれの電力源由来であるか按分することで、本方法論を適用することができる。ただし、バックアップ発電機の利用のような計画外の電力使用量については、リーケージとして評価することとする。